

# 21世紀から見た成田空港闘争史

2018/7/21

DEEP ACID

# 前書き：闘争は終わっていない

- 今も空港敷地内で暮らしている人がいる。＝敷地内に居住する次の世代が闘争を引き継いでいる。
- 今も第二滑走路延長、第三滑走路着工問題で闘争は続いている。
- 観光立国日本を目指す時代に、強制土地収用のあった時代を振り返る。ひいては平成以後の社会運動の変化について振り返る。

# 成田空港闘争とは

- 地元民に何も了承を得ずに突然予定地を新聞発表した国に対する住民の抵抗運動。
- 学生運動家も参加し、規模が拡大。当時はほぼ毎日のように報道がされていた。
- 1966年の発表から1978年の第一滑走路での開港までに12年を要する。第二滑走路の運用開始は2002年、当初計画では3500mだったが、現在は2500mで運用。第三滑走路は計画発表はしているが、着工はされていない。

# 長期間の闘争は住民闘争である

- 家族総出での闘争



少年行動隊

- 黄金爆弾(糞尿弾)

# 政党はあてにならない

- 予定地発表直後こそ革新政党が反対運動を支援していたが、それは闘争1年余りの短い期間であり、発表から52年経った今でも闘争が続いているのは純粹に地元住民の抵抗運動である。
- 自民党: 1ヶ月
- 共産党: 1年
- 社会党: 3年

# 新左翼過激派のサポートも最終的には分裂を招いた

- ゲリラ戦は基本的に新左翼(政党以外の政治思想団体)による。また、北原派、熱田派への分裂(1983年)は革命左翼の分裂によって引き起こされた。

- 北原派:核マル派
- 熱田派:第四セクター

(よって、1/1の第三滑走路着工阻止の脅迫電話は闘争外部の人間の犯行と考える)

# 北原派の主要人物

- 戸村一作

初期空港反対同盟委員長(分裂前)

- 北原鉦治

第二期反対同盟委員長(分裂後)

# 熱田派の主要人物

- 熱田一

初期空港反対同盟委員長

# 分裂に対する反省

- 反対闘争は学生運動や政党など様々な利害関係を持った人々が参入したことにより、運動が分裂して数々の内ゲバが発生することになった。
- このことを踏まえ、今日の反原発運動では「シングル・イシュー」を掲げたデモが多い(参加者個人が「安倍やめろ」などの異なる主張をしても、シュプレヒコールは反原発から外れないようにするなどの配慮がなされている)。



# 千葉県民にとっての成田空港 (賛成派)

- 当初はJR主導の成田新幹線の構想もあった。
- 空港闘争により成田スカイアクセス線(北総鉄道)の建設が滞り、JRの成田エクスプレスに先を越された京成電鉄は会社が傾きかけた。(子会社のオリエンタルランドがディズニーランドの成功により倒産せずに済んだともいえる)
- 成田スカイアクセス線運賃が高いのは、鉄道業者が複数入っているからである(北総鉄道、千葉ニュータウン鉄道、成田高速鉄道アクセス、成田高速鉄道。路線の使用料を京成電鉄が払って運行されている)。もちろん、闘争による開港の遅延によって負債が膨らんだことも要因。
- ディズニーランドを除き、目立った空港のメリットを生かしたビジネススポット、観光施設は誘致できていない。幕張新都心はあるが、空港直通の交通機関は高速バスがあるのみ。

# 千葉県民にとっての成田空港 (反対派)

## ● **千葉動労**

- 国労の「三里塚闘争との絶縁」を受けて分離独立した労働者組織。
- 2010年頃まで久留里線での春闘ストを続けていた。
- 今日においても労働組合運動のお手本とされている。
- また、実際に空港反対同盟と**労農同盟**を組んで共闘していた。

# 21世紀における 成田空港闘争振り返りの意義

# 福島原発事故の前例としての 土地強制収用

- 用地買収での条件が折り合わず、最後まで抵抗した農民の土地は強制収用された。  
→福島原発での立入制限区域もまた、汚染による農地の強制収用である。

# 沖縄米軍基地との類似性

- 空港も基地も、国が住民に対して一方的に押し付けた設備である。
- どちらも国家戦略上の重要な事業であることが国民の間に浸透しており、他地域の国民からの理解を得ることに苦勞している。
- 昭和、平成を貫く、長期の国と住民の間の闘争である。

# 三里塚闘争と水俣病闘争、泉南アスベスト闘争との相似性

- 水俣病問題、泉南アスベスト問題もまた、三里塚、沖縄同様、政府の「**地方棄民**」の態度が招いた闘争であった。三里塚と水俣病は昭和の二大民衆闘争と言っても過言ではない。
- 水俣病、アスベストはたとえ裁判などで勝利しても、次世代に苦痛が引き継がれてしまう点でさらに過酷な問題である。
- 三里塚闘争は学生闘争の参入により複雑化した面は否めないが、水俣病闘争は純粹に住民対政府の闘争として今も続いている。

# 社会運動そのものの変化(1)

- 労働組合のような社会運動の母体が解体された

→平成以降で成田空港や沖縄米軍基地に匹敵する社会運動は反原発運動を除いてほとんど起きていない。

そもそも現代は「家族」がすでに解体されており、共同体そのものが成立が難しい。

逆に、共同体の崩壊がニッチな趣味を深めるオタク文化を支える環境になっていると言える。

# 社会運動そのものの変化(2)

- SNSなどネットによる運動の広がり

→固定的な組織による社会運動から、流動的で自由な運動へ

ネットコミュニケーションが、「相手の顔が見えない」と言うマイナス面がある一方で、ニッチでも共通の趣味での人と人を結び付けやすい環境になっている。社会運動も流動的な一方で、多数の人々が短い時間でデモに参加したり、ボランティアに参加できるような情報が入手しやすくなった。



# オタク(ネット民)の参加する社会運動

- もちろん、ネット上でのヴァーチャルな社会運動へのコミットの代表は「ネット右翼」である。  
ただし、リアル社会への具体的なコミットは「在特会」を除けば目立ったものはない。
- 今日の国会議事堂前、官邸前デモはほとんどがネットを通じて集まっている。  
労働組合、学生運動団体などの組織はコアにはいるが、千人、万人単位の集客はネットあってのもの。

# 取材写真1



道路真正面に着陸する  
飛行機(道路は滑走路  
直前で地下に潜る)

# 取材写真2



着陸接近する飛行機  
(右手に民家がある)

# 取材写真3



空港敷地に囲まれた  
東峰神社から見る着  
陸直前の飛行機

# 住民の結束力

- 数々の派閥分裂はあったものの、空港予定地発表から50年経った今でも闘争が続いているのは、住民の結束力において他にない。その意味では、「昭和の新左翼の暴力闘争」と言うレッテルを貼られた史実を反原発、反沖縄基地に引き継がれている“**民衆闘争**”として読み解き直す時期にあると考える。

## (続き)

- 沖縄をはじめ、前に述べた闘争は全て住民にとっては「生涯を賭して、次世代に渡る」長い闘争になった(なっている)。それをマスコミは「学生運動や左翼政党のしわざだ」とし、被害者の立場に配慮した報道がされない時代になった。個別殺人事件での加害者への憎悪が増大する中、この矛盾した報道の在り方、日本人の心理のあり方を問いたい、というのがこの発表での主旨である。

# 参考文献

- 大地の乱 成田闘争／三里塚反対同盟事務局長の30年（北原鉦治著、お茶の水書房）
- 大木よね／三里塚の婆の記憶（三留理男編、田端書店）
- 映画「三里塚に生きる」プログラム（発行・編集：代島治彦、太田出版）
- 映画「三里塚のイカロス」プログラム（発行・編集：代島治彦、成旺印刷株式会社）